

書 評

民衆・社会主義及び現代中国

——姜克実著『現代中国をみる目』を読む——

李 梁

かねてから、日本の中国学界には二つ目立っている現象が存在していると思われる。その一つは、現代中国問題及びその研究が、戦前では学界の主流から殆ど無視されていたが、戦後ではまさにコペルニクスの旋回というべきなのか、それが一変して一躍学界の主流または原動力となった、ということである。もう一つは、戦後の中国学界では研究の方法論において、広く一般に上から下へという問題提起の傾向、またはそういう研究のパラダイムがみられる、ということである。その原因はともかくとして、要するに、そういう状況またその趨勢は、今日に至ってもなお改まっていないのみならず、ここ二十年来の、いわゆる中国の改革開放時代にあって、むしろ更に一層目立ってきたといつてよい。例えば、国別でみていくと、現代中国関係の論著の刊行部数は目下の出版界では間違いなくトップを走っているが、その洋々たる景観をつぶさに検証してみると、その多くは大抵「某某の時代」、「某某の中国」或は「某某の後の中国」「中国のゆくえ」「次のスーパーパワー：中国」などといった大人物、大枠組みを重んじ、マクロな推測を好むようなものだとすぐ気づくだろう。勿論、そうした上から下へのアプローチの意義またその必要性を完全に否定することはできないが、しかし事実上、その多くはブーム的ものに属し、マスメディアの需要や一般大衆の好奇心に応えているというものの、現代中国への眞の理解

には無益なばかりか有害とさえ言わざるを得ないのである。なぜなら、自覚的か否かにかかわらず、世俗迎合の動機がある以上、それは、大衆のグロテスクな心理およびその需要品の氾濫を助長するのみならず、さらに大概問題の本質並びにわれわれの視野を覆い隠してしまうからである。目下、巷間では人々を五里霧中に陥れさせるような憶測推論が飛び交い、眞の知見に富んだ研究力作が少ないというのは、恐らくその原因がそこにこそあると言えまいか。

ところが、最近出版された、姜克実著『現代中国をみる眼—民衆からみた社会主義—』（丸善ライブラリー、平成9年3月発行）は、まさに上述した流弊を一掃し、我々の耳目を一新させる好著だと言える。本書は250ページに及ばぬ文庫本の体裁をなしているが、しかし著者は、社会主義というキーワード及びその問題意識を論軸に、多くの異なる身分の証人——現代中国の眞実をみずから体験した民衆——を通していきいきとした現代中国における立体的断面図を次から次へと見事に描き出している。その方法論並びに論理の明快さといい、論拠および洞察力の確かさといい、いずれも近年来の類似する論著からめったに見られず、まさに再三吟味すべき好著だと言って過言ではない。

さて、本書は、全部で三大部に分けられ、各部に更に若干の章節が設けられている。第一部「中国を見る眼」は、本書の方法序論である。第二部「中国民衆の意識意識変遷史——一九四九～八五」は、本書の主体部分であり、また著者の中心論題の全論拠の所在でもある。第三部「社会主義とは何か」は、本書の総括であって、またその奥義の所在でもある。以下、筆者の読後の管見により、その特色を箇条に具体的に述べてみることにしよう。

あたかも本書のサブタイトル「民衆から見た社会主義」が示しているように、いかに社会主義を理解するかという問題は、本書における最も中心的な論点であるとともに、またその全部の方法論の出発点でもある。それは、もしも社会主義という概念とその実体の推移経緯を名実ともに明らかにせねば、現代中国への眞の理解には到底至れるものにならないということに起因しているからで

あろう。

いわば、一九八九年に発生した中国の天安門事件、とりわけ、その踵を接してドミノのように崩れ去ったソ連・東欧社会主義陣営の崩壊劇が見られた後、中国を含め、ソ連・東欧の社会主義の実践が事実上失敗に終わったというのは、それらの国々で実施されていたのが經典的意味の正統社会主義ではなく似て非なる社会主義だったからだという見方は、日本学界の左翼側を含めてひろく世界的に流行っている。このような流行の見解に対し、著者は、あえて本書の手法の違いを強調して次のように主張している。すなわち、本書においては、中国・ソ連など二〇世紀の社会主義国家の存在を、「エセ」また「粗野な社会主義」と見なさず、それを「唯一存在可能、あるいは必然的な社会主義の形態と見て、考察の対象とする」(15頁)のである。

本書が、その方法論においても内容においてもひときわ抜きんでているのは、煎じ詰めて言えば、そうした前提の明確性に負っているといつてよからう。というのは、自由主義ないし右翼の言説はさておいて、相次いで見られた社会主義の敗北の原因を、その歴史発展段階の「後進性」、および独裁者と特権階級、または腐敗現象の出現ないし共産党の政治経済政策の誤りなどといった要素に求めようとする外因論者、つまり理想的社会主義者達は、事実上、そういうシステムの内部構造への洞察と追究とを蔑ろにし、歴史の偶然性と必然性との関係を混淆してしまったのである。そのゆえ、彼らは、様々な不毛の仮説を持ち出す以外に、何ら問題の解決に役立つような理論や政策を練りあげることができていないばかりか、かえって「歴史学の墮落という結果をきたす」(9頁)のである。

著者が同時に周到に指摘したように、そうした「墮落」を来した背景に日本独特の歴史社会の要因がひそんでいるという。すなわち、戦後では、学界で大きな勢力をはっていた左翼、とりわけ中国学界の左翼は、かつて戦前の天皇制国家主義および軍国主義に対する批判が行われれば行われるほど、社会主義、

ことに共産主義革命の成功を勝ち取ったばかりの現代中国への賛美が声高く唱えられていたのである。当時の歴史的状況からみて、こうした二元的論法はそれほど理解に難くないだろう。だが、そうはいっても、かれらは、いつまでもそういう特定の時空下に築かれた認識または情緒を固持して捨てず、言い換えれば、あまりにも理想的情感世界に耽り込んでいるため、つねに変化してやまぬ現実社会への直視を避けるか、見ても明確には見ず、要するに理想的情感世界を厳しい社会現実そのまま置き換えようとしたため、結局、だんだんとその社会観察の目および学問の方法論の硬直化を招いてしまったのである。ところが、それだけなら、まだ歴史および現実社会への認識能力を完全に失うほど「墮落」するには至らなかったが、不幸なのは、かれらはその方法論におけるもう一つの欠陥、つまり前述した「上から下へ」という直線型の方法論およびその史観によって、ついにそういう能力を完全に失ったのである。ある意味から言えば、八九年ソ連・東欧社会主義陣営が崩壊した直後から、一時、学界および論壇を大いに賑わした中国予測が今日となってほとんど見事に外れてしまったのも、そうした方法論における欠陥による自然な結果だと言ってよからう。

言うまでもなく、そういう方法論の桎梏を打ち破り、かつその欠陥を補い、それによって、下（民衆およびその心理意識または精神状態の変化など）から上（制度、イデオロギー及びその領袖人物など）へと現代中国の発展変化を捉えようとすることを、著者は予め意図しているだろう。それは、極めて巨大で困難な作業に違いない。つまり、ほとんど浩瀚と言ってよいほどのさまざまな資料に対し、地味でしかも煩瑣な収集、整理、分析の仕事に慎重に取り組まなければならないからである。ところが、著者は、その一貫した問題意識に基づき、鋭敏にも民衆意識の変遷という主軸をめぐって、一九四九年の人民中国の成立から今日に至るまでの現代中国とその変貌ぶりを一体に貫き、一齣のいきいきとした人間社会の連続ドラマを見事に描き出したのである。その明快な論理と

見事な手法とには思わず脱帽してしまうが、紙幅の制限により、ここでは、その主な特色について簡単に論じてみることにする。

まず、前述したように、著者がいち早く民衆意識の変遷に着眼したのは、まさにその一貫した問題意識およびその方法論に負う結果だと言ってよい。いわば、社会主義イデオロギーの核心が「公」意識そのものである。そのゆえ、上からは、いわゆる「大公無私」や「滅私奉公」という精神が提唱され、かつ全国の民衆に「雷鋒に学べ」（雷鋒とは党とその領袖に限りなく忠誠心をもち、本職の仕事と大衆奉仕のために献身した模範的な解放軍兵士だった）と呼び掛けて、そのキャンペーンを大々的に行わねばならないのである。しかし、特定な環境または時期に置かれた場合以外に、人間の本性にしてみれば、そういう精神およびその行為を持続させるのは、事実上不可能なことである。人民解放軍の兵士が「雷鋒になることは戦場の英雄になることよりも難しい」（176頁）とため息をもらしたのはその好例の一つであろう。そういう意味で、かつて、毛沢東が「大躍進運動」を起こし、さらに著名な「継続革命論」のもと、十年の長きにわたって「無産階級文化大革命運動」を発動し展開したのも、正にそういう特定の社会情勢を保持し、或はたえずそういう情勢の再現によって、民衆を一刻たりとも「公」意識から離れさせず、以て最終的に共産主義の理想社会の実現という目標を達成させようとしたからである。ちなみに、一九四九年以降、益々白熱化していった毛沢東の劉少奇、鄧小平等いわゆる実務派党政官僚達との政争分岐、および昨今大流行の最中にある社会主義市場経済が名実とも相悖っているのも、そうした発想からその論理のイロハを多少伺い知ることができよう。したがって、社会主義制度の下の民衆意識の変遷諸因及びその過程を解明しようとするのは、現代中国、殊に改革開放を的確に理解する鍵だとみてよい。まさに「慧眼」と称すべきである。

次に、そういう過程を再現させるために、著者は、出来るだけ異なる階層、また異なる身分を持つ人物を登場させ、かれらの口を通してその真実の体験を

語らせたのである。そして、その登場人物の中には労働者、農民、知識人、小学生並びに一般市民のほかに、党や政府の高級役人、軍人ないし中国滞在歴のある外国人も含まれている。だが、著者の目的は「決して登場人物たち一人一人の人間ドラマを描くのではない。よりたくさんの実例を通じて、社会主義制度の下に演じられたある民族全体のドラマを仕上げ、未知の歴史像を紐解くことにある」（はしがき）のである。この一見してアナル派心性史学風の手法は、本書を生彩あらしめているのみならず、またその説得力をもさらにつよめたのである。

更に、同時代の人として、あるいはかつて労働者、農民および兵士という多彩なキャリアのある「歴史の生き証人」としての著者は、本来なら、自らも登場して自分の体験を語って聞かせる資格を十分に持っているはずだが、しかし著者は、鄭念（『上海の夜』の著者）や張戎（世界的ベストセラー『ワイルド・スワン』の著者）のように、あえて自分を自著の中に登場させなかったのである。それは、「自分一人の経験を語るよりも、この経験を生かして100人の経験を正しく伝えることこそ、歴史の学徒たる私の使命なのではないかと、感じたからである」（あとがき）。そのため、著者は終始本書において、「資料の価値・真偽の弁別役、またドラマの解説者の役を演じ」ていたのである（同上）。そうした冷徹な姿勢は、少々誇張的に言えば、成熟した学者としての人格力量を現しているのみならず、また本書の客観真実性および卓見に富んでいる最良の保証でもあると言えよう。

最後に、本書における最大または最も注目すべき特色は、なんと言ってもやはり著者の一貫した問題意識およびその明快な論理にある、と言わねばならない。より具体的に言うと、つまり今ここ日本で引っ張りだこみたいな観ある一部の中國大陸出身の新米学者と違って、著者の現代中国に対する一貫した関心は、時勢の需要に駆り立てられたものではなく、「ある宿命的義務感」（はしがき、あとがき）から来たのである。ついでにふれるが、年齢からみてみれば、

著者がいわゆる「老三届」（主として文革によって、七十年代後半の改革開放時代、つまり十年ほど遅れてはじめて入試を通して大学に入った人々を指す）に近い。いわば、著者は、高校を出てから大学に入るまでの間、前後にして労働者、農民及び兵士を経験して、あしかけ十年ほどの歳月が費やされたが、そのおかげで豊富でかつ切実な社会体験を積んできた訳である。そして、こうした体験とその史学専攻の素養こそ、著者にいち早く社会主義という問題について思考させ関心をもたせた原動力であるとともに、また既存の社会主義における根本的な病巣が「人間」という問題が真に解決できていなかったことにある、という認識に至らせた鍵でもある。著者の明快な論理が、まさにそうした認識の上において展開されていたのである。それは本書の立論の根本に関わる問題でもあるため、ここでは、煩を厭わずに、もう少し立ち入って検証してみることになろう。

周知の通り、社会主義およびその国家の根本的な原理は「公」概念そのものである。それによって、各種の社会制度および国家イデオロギー、たとえば国家計画経済、生産資料、生産方式、分配手段ひいては個々の人々の公有化などが構築されている。著者の見方によれば、このような原理に基づいてつくられた社会主義国家では、システムにおいて、次のような四大特徴がみられる。すなわち、まず第一に、思想方法における絶対主義のこと；第二に、思想意識の面で「国家」、「社会」、「公」の利益が重視され、それに対する「民衆」、「個人」、「私」の献身、自己犠牲が要求されること；第三に、中央集権的専制政治、一党・一階級の独裁、少数人による終身政治の組織形態のこと；第四に、経済上の国有・公有制、非利潤追求の統制経済。分配上の平均主義方式と国家による社会保障、国民福祉のこと、などである（219～222頁）という。

前述のごとく、そういう「公」という根本的原理によってつくられた一連の社会制度をもつ既存の社会主義国家にとって、たんに制度としての具現化ばかりでなく、同時に、全民衆に持続的でかつ益々高揚していくべき「公」意識を

もししっかりと持たせねばならないのである。ところが、そういう考え、つまり公意識はただ「特定の条件の下」においてしか十分に芽生え、かつ効力を生じることが出来ないというのが事実である。いわゆる「特定の条件」とは、著者の言葉を借りて表現すると、つまり階級矛盾の激化、「三座大山」（封建主義、植民地主義と帝国主義）の圧迫や侵略にひどく苦しみ、人々が個として生存を続けることが困難になった時こそ、そのエネルギーは、はじめて「公」および「国家」の方に傾注していける、ということである。十九世紀なかばから今世紀の初頭にかけての西欧、ロシア、および一九四九年までの中国には、すなわちそうした歴史事実がかつて存在していたのである。しかも、そういう民衆の精神状態がたとえ革命成功後の一定の時期内においてなお維持できるとしても、永続することはありえないのである。なぜなら、「いったん階級的矛盾、あるいは民族的矛盾の激化した非常時がおわってしまうと、一時的に退いていた自我、人間の欲望が甦ってくるのはごく自然なことで、いくら政治運動や思想教育を施しても変わらないものである。（中略）社会主義を没落させた内在的・決定的要素は、まさにこの自我の目覚めという、人間性に基づく自然発生的現象なのである」（227頁）、というからである。

更に分かりやすく言えば、特定条件がいったん消え失せると、民衆生来の自我という意識が自ずと芽生えてきて、そこで、彼らは「公」、或はその観念の集大成としての社会主義国家にふたたび全神経を注ぐことができなくなる訳である。そして、そのあらわれとして、人々の働く意欲が日に日に衰えていくにしたがい、社会生産力の衰退による民衆全体にわたる物質生活の日々窮乏化、最後に「飯が食えなくなった」ことによって体制が余儀なく崩壊されてしまう、という歴史の自然法則を辿るのである。ソ連・東欧の実例は言うまでもないが、現に中国は、なし崩しの体制崩壊を避けようとする以上、事実として非公有化、つまり非社会主義化の改革開放が行われざるを得ないのも同じ訳なのである。

ところが、基本的原理から社会主義とそのイデオロギーの現実可能性が否定

され、更に、それによって、現代中国における最大な社会的病巣は「人間」という問題が未だ解決出来ていないところにあると指摘しえた以上、著者が、われわれのために描いてくれた未来中国の青写真——つまり俗に言う現代中国のゆくえ——はいったい如何なるものだろうか。それは、無論、われわれに大いに興味を感じさせる問題である。だが残念ながら、著者のこの問題に対する論述はあまりにも簡略で曖昧の感さえある。いわば、著者はただ一つの、通俗的な折衷案しか私たちに開示してくれなかったのである。すなわち「将来の中国は、もううまくいくならば、それは、社会主義の中国でもなく資本主義の中国でもない。その両者の長所を吸収し短所を克服した新しいシステムをもつ国でなければならない」(233頁)というのはそれである。確かに、この大きな問題を取り扱うには文庫本という限られる紙幅では至難だと言わねばならないが、しかしそれが、著者の一貫した問題意識の延長であるとともに、また上述した著者の立論を構築するための重要な、不可欠なもう一面でもある以上、われわれは、やはり著者の将来の解答に対する期待を禁じえないだろう。

もちろん、指摘しうる問題点はそれだけではない。たとえば、本書の論理からいえば、既存の社会主義の参照数としての資本主義の経済制度に対して十分に説明を行っていないこと、とりわけ近代的経済制度がもたらした資源や環境破壊および人類社会の未来への影響などといった環境倫理の問題には殆ど言及していないこと、などである。ただ、ここに、そういった諸々の問題に対する論評を一行余裕はないため、筆者は、ただその中において重大な理論問題と関連している一点のみを取り上げて、著者の教えを乞いたい。

すなわち、基本的原理にしても具体的な歴史事実にしても、上述した著者の立論は筋が通っているとひとまず言ってよいだろう。ところが、視角を換えれば、つまり形而上的にみれば、人間が人間である以上、理想王国への憧れの情を永遠に捨てきれないのもまた事実であろう。いわば、具体的な歴史社会からみれば、社会主義はむしろ資本主義のアンチテーゼとして歴史の絵舞台のうえ

に登場してきたのであるが、しかし、まさにそのアンチテーゼの深層には人間たるゆえんの、しかも人類社会が存続さえすれば、一日たりとも捨てられない理想王国、言い換えれば、つまりユートピアへの憧れの情が見え隠れしているのではあるまいか。さらに敷衍していえば、近代産業社会の発達、とくに現代ハイテク社会の到来にしたがい、元来有機的共同体としての人間社会が技術的にアナログ化され、人間が技術至上主義の虜となりいわゆる「故郷喪失」の憂鬱症に苦しんでいる昨今において、従来より思想上除け者視されがちなユートピアの思想とその精神は改めて再確認し見直す必要があるのではあるまいか。事実、具体的な中味はともかくとすれば、少なくとも形式上、東西の歴史社会において、ユートピアの思想とその精神は絶えることなく延々と今日まで引き続いてきているわけである。仏教における「六欲天」思想、中国思想における桃源郷言説とその心性、さらにプラトンの『理想国』からトーマス・モアの『ユートピア』をへて、エルンスト・ブロッホの『ユートピアの精神』にいたるものなどは、いずれもその証だとみてよからう。まさに、オスカー・ワイルドがかつて『社会主義下の人間の魂』という著書の中において書いたとおり、「ユートピアを含まない世界地図は一瞥にすら値しない。なぜならそこには人間性がつねに立ち寄る国が欠けているからである。人間性がそこに立ち寄るとき、それは外に目を向け、より良き世界を目にして、出帆する。進歩とはユートピアの実現である」（オスカー・ワイルド全集第四巻、青土社、1989年。ここでは、月森左知訳、ルイス・マンズフォード著『ユートピアの思想的省察』、新評論、1997年、35頁からの孫引き）。

すなわち、一言でいえば、生産手段の私有を本とする資本主義と生産手段の社会所有（公有）を本とする社会主義との根本的な違いは、その現実における様々な実践の次元にあるというより、その目指している、または確信しているありうべき未来像にあるというべきである。そういう意味で、全人類の解放を夢み、道徳の王国と永遠な正義と（共産主義社会）を実現させようとする社会

主義は、まぎれもなくすぐれてユートピア的だと言えるだろう。確かに、既存の社会主義国家の一連の「大いなる失敗」がげんに見られているが、しかし一方、最近見られたように、ヨーロッパで社会主義を標榜する政治集団（政党）が権力の座に返り咲く現象が現れてきたのも歴然とした事実である。それがたとえ特殊な事例又は一過性的な現象だとしても、そういう現象からみて、未来の人類社会においても、如何なる主義やレトリックを主張し用いようとするかは関係なく、今日でみられる資本主義対社会主義という二元対立の社会構図がふたたび再現される可能性が十分にあると言えまいか。それは、まさにわれわれが人間であり、しかも人間たるゆえんの社会の中で、いつまでも存続していかうとする願望をもっている人間だからである。

最後に、本書の理解の一助として著者自身について簡単に紹介しておこう。著者は、一九八二年秋、中国天津市にある南開大学歴史系（学部）卒業し、その後、上海の復旦大学研究生院（大学院）に進学したが、まもなく早稲田大学に留学するため来日した。一九九一年に、『石橋湛山の思想史的研究』（早稲田大学出版部、1992年）を以て、早稲田大学から文学博士の学位を授与され、その後同大学文学部助手をへて、現在岡山大学文学部助教授として日本近現代史と現代中国論の教育と研究に精力的に取り組んでいる。ついでに言うが、上述の著書と陶徳民（元米国マサチューセッツ州立ブリッジウォーター・カレッジ助教授、現在関西大学助教授）著『懷徳堂朱子学の研究』（大阪大学出版会、1994年）は、管見では、戦後人文・社会科学領域における中国大陸出身の留日学生による日本語著書の中でいままで最も優れているものだと思う。なぜなら、そういう著書の中に中国伝統史学においてことに重んじられている「才、学、識」（才能、学力と識見。唐の劉子玄が『史通』において提起される史学専攻者の三大要件）を兼ね備えた流風余韻がみられるのみならず、またそれらは、目下中国大陸出身の学人の一部から蔑ろにされがちな「史徳」（清代中期の史家章学誠は『文史通義・内篇三』において提起される史学者のもう一つの要件。なお、

彼は、史徳について、「徳というものは何か。著書者の心術を謂うなり」と定義している）をも現しているからである。以上をもって本書の評とするが、当否いかんは、識者は自ずとそれを知らるうと思う。

（本稿は初校の際、日本語の表現について、山田史生氏からの貴重な助言をいただき、ここに記して謝意を表する。）